電子版
No.17
2022/01/01

教文通信

発行所| 長野県教育文化会議
発行人　寺尾　真純

今号の内容

1．新年ごあいさつ
　教文議長

2．「ジェンダー平等教育」
　総合研究会　講演
　河野銀子さん（山形大学）　報告　中村万里菜さん（飯山高校）

教文通信アーカイブス

教文通信　No.1（電子版）
　新型コロナウイルス感染症禍でのアンケート結果
教文通信　No.2（電子版）
　ジェンダー平等の教育を考える総研資料
教文通信　No.3（電子版）
　職場教研報告
教文通信　No.4（電子版）
　上西充子さん（法政大学教授）講演会報告
教文通信　No.5（電子版）
　松川高校・理科研究会・教文運営員会報告
教文通信　No.6（電子版）

1．新年のごあいさつ

教文会議議長　寺尾　真純

謹賀新年
過去－現在－未来の創造へ

明けましておめでとうございます。本年も引き続くコロナ禍の中、新たな年を迎えました。自宅で新年を迎えられた方も多かったのではと察します。新たな変異株出現のもと、引き続きエッセンシャルワーカーに敬意をあらわす次第です。コロナ禍において、生命、環境、貧困と格差、生活のあり方等々、現代社会の課題や問題が改めて問われ続けています。学校や教育を巡っても、本来の在り方の問い直しの機会となっています。

中教審は 2021 年 1 月「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」を公表しました。また内閣府、経産省、デジタル庁等様々な教育政策関連の審議体が教育へ参入する状況も生まれています。誰のための教育なのか。教育政策が一層政財界のための人材育成になってきています。次期 cos、Society5.0、GIGA スクール構想等は、十分な検証もないまま、一方的な施策実施を求め、学校現場を混乱させています。「評価」を巡っても一方的に教育を矮小画一化、内発的な学びを尊重することを欠いた施策を強いる動きとなっています。デジタルで絡め取られたデータの行き場も気になります。人格形成はじめ教育や社会において思考の自律性、多様性を奪うことに繋がりかねません。教員免許更新制の発展的解消を巡る動きも、管理監視のもとで教師の学びを規格矮小化、同僚性や共同の喪失につながるであろう大きな問題、危険性を孕んでいます。これらの流れや施策にはオルタナティヴな取り組みが必要と考えます。

教文会議は半世紀の歴史を刻み、関係性の中、常に生徒や教職員の成長、主権者・地球市民として平和な民主社会の発展に寄与する学びを追求してきました。目に見えない存在との共存は今後も続くでしょうが、何時どきでも「教育とは何か」ということを真摯に問い続け、創造性発揮の場、自由闊達な実践にあたるという歩みは続きます。11 月の運営委員会でも、困難な中、参加と共同のもと、支部や研究会において様々な工夫や実践が報告されました。今後も新たな日常の創造につなげる、その思いを強く抱かせるものでした。会員の皆さまには健康に留意いただき、日々の活動において確かな実感、感動を分かち合える 1 年になることを祈念します。平和、真実を貫く民主教育の確立・発展に様々な面から追求、前進する年としましょう。

「学びの『指標』（案）」討議資料
教文通信　№7（電子版）
支部教研特集
教文通信　№8（電子版）
支部教研特集
教文通信　№9（電子版）
家庭科教育研究会県との懇談会
教文通信　№10（電子版）
新年のご挨拶
教文通信　№11（電子版）
「ジェンダー平等の教育」総合研究会　菊地夏野さん（名古屋市立大学）講演
教文通信　№12（電子版）
「教育の ICT 化を考える」総合研究会　山本宏樹さん（東京電機大学）講演
教文通信　№13（電子版）
「特別支援教育」総合研究会　三木裕和さん（鳥取大学）講演、報告　坂戸千明さん（全障研長野支部）、北原恵美さん（箕輪進修高校）
教文通信　№14（電子版）
「学力と評価を考える」総合研究会　佐貫浩さん（法政大学）講演、宮下与兵衛さん（東京都立大学）講演、報告　田澤秀子さん（上農高校）、諏訪支部教研報告
教文通信　№15（電子版）
夏の総研 8.7
支部教研報告
教文通信　№16（電子版）
県教研特集 「教育のつどい」推薦レポート

教文通信　№277（紙版）
「コロナ後の教育はどうあるべきか」
勝野 正章さん
（東京大学教授）

教文通信　№278（紙版）
「資質・能力」論批判と教育評価のあり方について
佐貫 浩さん
（法政大学名誉教授）
「教育は何を評価してきたのか」
本田由紀さん（東京大学教授）講演会の報告

２．「ジェンダー平等の教育を考える」総合研究会（2021.12.18）

講演　河野銀子さん　（山形大学）

「学校におけるジェンダー秩序再生産のカラクリ」“女だから、男だから、ではなく、私だから、の時代へ”

1999 年 6 月 23 日、男女共同参画社会基本法が公布・施行されたことにちなみ、毎年この時期に男女共同参画週間が設けられています。前述のキャッチフレーズは 2021 年度のもの、社会の動きが極めてゆっくりとしたものであることがわかります。

ジェンダー平等を実現するため、日本では男女共同参画の法整備などを通じて推進してきました。「参画」という言葉には、女性を様々な分野の土俵に「上げてあげる」ということではなく、土俵を「一緒につくろう」という意味が込められています。1985 年の男女雇用機会均等法から始まり、様々な法律ができてきました。しかし、実態はどうでしょう。1991 年にできた育児休業法では、男女問わず育休が取れる仕組みではあったものの、男性の育休取得率はほとんど伸びません。今年 6 月には男性の育休が重視される形に改正され、今後の動向に注目が集まります。先日の衆院選でも、女性候補者、また当選者はまだまだ少ない状況です。

男女共同参画社会基本法では、既に男女間の格差がある場合は、ポジティブ・アクションによって機会を平等にする措置が取られるようになっています。国や地方公共団体にはもちろん責務がありますが、職域や学校にも同様の努力義務が課せられています。例えば、大学では同じような業績を持つ男女がいた場合、女性の方を採用する傾向も見られます。学校現場でいえば、PTA 活動もその対象になります。また、女性管理職の登用も増えてきていますが、その割合目標は「目標が達成できなさそうだ」という理由で目標値が後退しています。

日本のジェンダーギャップ指数は 156 カ国中 120 位、と非常に低い位置にあります。この指数については、政治・経済分野の影響が大きいという問題もありますが、教育分野に関しても順位は低下傾向にあります。よく、男女間での大学進学率の差が注目されますが、専攻分野についても、明確な男女差が見られます。女性の理系進学者が少ないことはよく言われていますが、実は社会科学系も女性が少ないのです。ただし、地域差もあるようなので、政策等に反映させるためには、地方の声をしっかりと届けることが重要になってきます。

こうした差は家庭の影響もありますが、初中等教育段階の学校教育の影響がかなり大きいと考えられます。その背景にあるのが「無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）」です。「男性は主たる稼ぎ手であるべきだ」「息子の結婚相手が女性で良かった」といった一見悪気はないのだけれど、他のあり方を排除してしまうことがあるのです。このアンコンシャス・バイアスをなくすことは難しいかもしれませんが、学校現場にもそれはある、もしくは学校自体がつくり出しているのだ、ということに気付くのは重要です。

中学・高校では女性教員が少なくなっています。それを見ている生徒達はそうした学校の状態を「自然」なものだと捉えてしまうのです。教科書の中にも「隠れたカリキュ

ラム」が存在しています。例えば、挿絵に登場する博士は男性で眼鏡をかけている、料理をしているのは女性であるといった性別ステレオタイプが使われていたりします。些細なことかもしれませんが、毎日のように触れているうちに、子ども達のアンコンシャス・バイアスがつくられ、ジェンダー秩序が再生産されていきます。

　教師自身も「女の子はガスバーナーに火がつけられなくても仕方ない」などジェンダーの視点で考えると適切でない指導をしてしまうことがあります。教育制度などを個々の教師が変えることは難しいですが、教科書に注釈を加えていったり、授業や HR 活動を変えていくことはできるはずです。今後、様々な実践が行われることを期待しています。

（※当サイトの内容、テキスト、画像などは転載禁止です。教文会議事務局）

«感想»

■教員世界における男女格差のお話をされるのかと思っていましたが、それだけでなく教員が生徒に対してバイアスをかけているという非常に興味深い問題を取り上げていただき、良い意味で期待を裏切られました。うなずける点も多く、先生のご指摘の問題を授業にどう反映させられるか分かりませんが、意識をしていきたいと思います。

■国内のこと、海外の現状など、データに基づいたお話はわかりやすかったです。ジェンダーの問題を考える上で基本的なことがよくまとまっていたので全員の教員に聞いてほしい内容でした。(アンコンシャスバイアスについて、暦のたとえは秀逸だったので、どこかで使わせてもらいたいです。)無自覚に今のジェンダー秩序を次の世代に繋げていかないようにしたいと思います。ありがとうございました。

■ジェンダー平等について、脳科学的な見地（男性＝課題解決的思考、女性＝共感的思考など）との接続はどうなっているのだろう？という疑問をもって今回参加させていただき、質問させていただきました。河野先生から、行動特性が個人によって連続体であるにもかかわらず（「性スペクトラム」）、男女の二元法の枠で見てしまうことの問題についてご指摘いただき、なるほどと考えさせられました。また、男性的・女性的

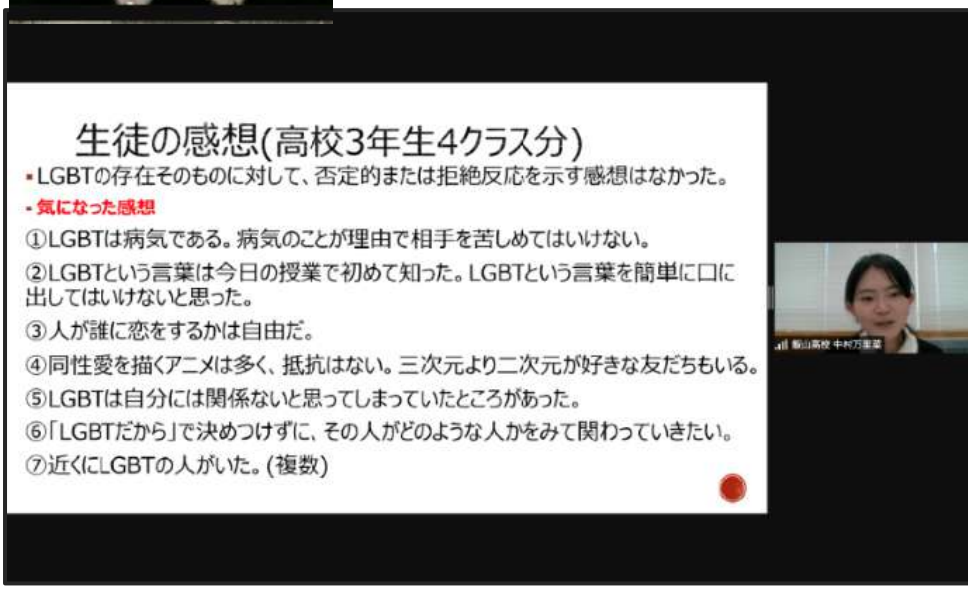
とされる行動特性についても、後天的に学習して身についている可能性も指摘され、目から鱗の思いでした。

■進路指導をする学級担任は、生徒の人生設計に大きく関わります。自分自身が気づかないバイアスにかかったまま進路指導をしてしまっているのではないかと少し心配になりました。また、学習の機会があればと思います。

報告　中村万里菜さん（飯山高校）

「映画『カランコエの花』を鑑賞した高校生の感想から見るジェンダー観」

報告者は大学時代、ジェンダー研究をされ、高校教員になってから授業や日頃の生活の中でジェンダー問題を扱うことを模索しています。英語科の教員として授業実践でジェンダー教育に取り組まれています。教材として国連でのエマワトソン「HeForShe」のスピーチ、同性婚法制化の是非に関する英文や SDG s 目標 5「ジェンダー平等を実現しよう」の英文などを生



徒とともに学んでいます。さらに飯山高校の人権教育の一環として映画「カランコエの花」（2016）を鑑賞し全校生徒でジェンダーの課題について考える実践を行いました。作品は「無意識の差別を描く」内容で LGBT が抱える問題を多角的、立体的に描いています。映画は何が正しいか価値判断を示さず、視聴者が考える余地を残しています。

総研では高校 3 年生 4 クラスの感想の報告いただきました。生徒の反応は概ね「LGBT の存在そのものに対して、否定的または拒絶反応を示す感想はなかった」そうですが、一部の生徒からは否定的な意見が出されたそうです。その背景の分析は各校での課題分析に敷衍することが可能となるでしょう。

学校におけるジェンダーに関わる課題としては、「教員の発言や支援が生徒を傷つけてしまう可能性がある」「学校や教育活動の中（名簿、制服、トイレ、部活動、体育の授業など）で、異性愛主義と性別二元論が前提となっている場合が多い」と指摘されました。河野銀子さんの講演を受けて、まさしくアンコンシャス・バイアスが学校現場に存在し、影響を持つことを示したものと言えます。生徒の捉え方、教職員の意識変革など問題提起をしていただきました。

«参考»

Full Transcript of Emma Watson's Speech on Gender Equality at the UN

https://ranierienglish.weebly.com/uploads/5/9/1/9/59197867/full-transcript-of-emma-watson.pdf

３．県教研レポート（「教育のつどい」推薦レポ）

県教研から 2022 年度「教育のつどい」へ以下のレポートが推薦されました。
追加分を掲載します。

◆19分科会「平和と国際連帯の教育」

2018JENESYS 参加高校生

（小宮山勝人さん・篠ノ井高校）

「『多文化共生体験型授業』高校生が教える小学校出前授業」

◆特設分科会「学校社会におけるジェンダー平等を考える」

大日方　光さん（小諸商業高校）

「『性的同意』を理解してもらうために試みたこと」

中村　万里菜さん（飯山高校）

「映画『カランコエの花』を鑑賞した高校生の感想から見るジェンダー観」

※当サイト内のすべてのコンテンツの無断転載・無断使用はご遠慮ください。
長野県教文会議事務局